

# つくる

## 草加神楽会の誕生と活動を振り返って

草加神楽会代表 浜野 幸一

### はじめに

今年の2月3日、鳩ヶ谷氷川神社の神楽殿の前は、子どもを含む多くの人たちでごった返していました。節分祭の豆まきが始まるのを待っているのです。神楽殿の上では袴を付けた氏子のみなさんや神主さんたちに交じって、私たち草加神楽会のメンバーもその時が来るのを待っていました。午後3時、花火の音が境内に鳴り響くと同時に豆まきが始まりました。壇上から一斉に舂に入れた袋詰め

の豆をまきます。舂に豆がなくなると詰め替えて何杯も何杯もまいて、楽しい一時を過ごしました。(写真1)

実はこの日は、私たち神楽会にとって特別な日です。というのは、豆まきに先立って神楽殿で神楽を奉納すると共に、本殿での儀式に参加し袴を付けて正装している50人を超す氏子のみなさんや神主さんたちの前で「神楽の舞」を舞うという大仕事があるからです。緊張しながら力を合わせて仕事をやり終えた後の充実感を胸に豆まきをするのは快いものです。

地域で神楽を楽しむ、そんなことはこれまで考えたこともありませんでした。それがいつの間にかどっぶり漬かっている自分に気づき、なんとも不思議な気持ちになることがあります。ちょっととした出会いが転機となって、退職後の新しい生きがいを見つけたといってもよいかも知れません。

昨年の10月以降だけでも、新田西文化センターまつり、鳩ヶ谷氷川神社例大祭、医療生協春日部診療所「クリスマスコンサート」、政党新春のつどい、鳩ヶ谷氷川神社節分祭、新田西文化センター伝統芸能発表会など6か所で公演(発表)しました。今、地域に注目されていることを実感しながら、和やかな中にも練習と発表で忙しい日々を送っています。そんな神楽会の様子について、思いのままに書いてみました。

### 草加神楽会の誕生

草加神楽会は、岩手県南部から宮城県北部にまたがる地域で行われている南部神楽を伝承してきた東京栗駒神楽会のメンバーが高齢化し、解散したのを受けてその活動を引き継ぐ形で、2012年2月に発足しました。

その前年の10月、近所(草加市)に住んでいる栗駒会の会員さんと偶然に出会い、「年をとって体が動かないので解散することにしたけれども伝統を絶やしたくない。」と聞きました。そのことがきっかけとなって近く知り合い10人程がこの方の家に集まり栗駒会



写真1・鳩ヶ谷氷川神社節分祭の様子



写真2・医療生協春日部診療所クリスマスコンサートでの発表風景



写真3・栗駒神楽会の皆さんとの交流と練習の様子

の活動を継承できないか話し合いました。そして、とりあえず栗駒会の練習に参加し、様子を見せてもらうことになりました。それから約4ヵ月間、奉納神楽の練習に参加しお酒を飲みながら（飲めない人も多いのですが）、和気あいあいの雰囲気の中で神楽への思いを聞き交流を深めみんなの気持ちを確かめあってきました。

そうしてお互いの信頼関係が育まれる中で、「不安はあるけれどやってみようか。」という流れができました。だめ押しになったのは、栗駒会の最後の演技になった節分祭での奉納神楽です。初めてみる神楽の優雅な立ち居振る舞い、伝統の醸し出す奥深さ…。参加した誰もが感銘し、何とか継承したいという

強い思いを共有し合うことになりました。

こうして節分祭が終わった後の神楽殿の上で、栗駒会から指導者として3人の方を迎え、「草加神楽会」は誕生しました。

それまで栗駒会が使っていた道具類（装束や面、太鼓、鉦、幕、アンプなど）は、そのまま譲り受ける（一部は買い取る）ことになりました。

## メンバーは

会員は現在、13人（男6人、女7人）です。栗駒神楽会からの会員3名を中心に、学童保育OBや元教員、ダンス連盟や年金者組合の役員さん、お神輿大好きといった方、パソコン教室の先生や化粧品品の販売をしている人も

います。発足当初の会員は、指導をして下さる方お一人を除いて、皆さん、近所の色々なつながりの中で友だち関係にあった人たちです。ですから主な練習場になっている草加市立新田西文化センターから自転車で5〜6分の距離のところに住んでいる人がほとんどです。（その後、新しく加わった人の中にはやや遠いところに住んでいる人もいます）

年齢構成は今のところ、60代を中心に50代、70代、80代と高齢者中心ですが、働き盛りの方で仲間になりたいといっている人もいます。若い人たちの参加も期待でき、これからさらに層が厚くなっていくだろうと思っています。（写真3・メンバー）

## 南部神楽とは

神楽は、神社で上演（奉納）されるものと相場が決まっていますが、民間に伝承され里神楽として様々な分野が生み出されています。私たちが受け継ごうとしている南部神楽は、岩手県南部から宮城県北部にまたがる地域で盛んに行われている神楽です。演劇の要素を盛り込んだものが主流になっていて、いろいろな物語を神楽に取り入れているので人気があり、劇神楽と呼ばれています。その特徴は、舞い手がセリフを述べることです（江戸神楽にはセリフがなく動作だけで表現するそうです）。セリフの最初に「おー」と発声しますが、應（応）という文字があてられ、相手に応じる、セリフを発声しますという合

図だと聞きました。

## 特技や創意を生かして 準備、運営

道具類は引き継いだので揃っているといっても衣裳などは人数が増えたので足りません。足りない衣裳は、女性会員を中心に家族も動員して、筆筒の底に眠っていた振り袖など着物20着余りを持ち寄り、自分たちで仕立て直しをして作り直しました。

また、「幕」や「裃はんてん」には「栗駒神楽」の名前が入っているので使うには抵抗があります。裃は業者に頼み新しく作り直しましたが、背景として使用する横4・5m×縦2mの「幕」は、会員が縫い合わせた布に、みんなで絵を描いて作り直しました。ああでもないこうでもないといいながら学芸会準備のような作業でしたが、結構満足のいくものができ、自分たちの力を見直すことにもなりました。

パソコンでDVDや写真の配布ができるように二日間かけてパソコン講習会もしました。会員向けのニュースは毎週発行されました。公演に当たっては、見ている人に分かるように演目等について解説したニュースも発行しています。

こうしたことは、会員の特技を生かした自発的な呼びかけと取り組みで行われていきます。

春先（3月頃）の日曜日に、お酒も用意して全員で総会を開きます。そこで次の活動に

向け、演目を決めたり、舞い手や囃子手の分担を決め、道具の購入計画なども相談していきます。

## これまでの活動・一年目 (2月～翌年3月)

一年目の演目は、「赤沢山の悲劇（祐康最後の場）」という鎌倉時代の仇打ち事件（曾我兄弟）を題材にした上演時間25分ほどの劇（神楽）でした。曾我兄弟の父親が政敵の待ち伏せに会い一命が尽きるという一場です。歌舞伎や浄瑠璃を神楽に移して演劇性を持たせた劇神楽の中でも人気のある題材です。

10月の氷川神社例大祭での奉納を目標に練習を始めましたが、新田西文化センターまつりが直前にあり、そこでの発表が最初の公演になりました。

発表の当日、近所の人たちの中に「神楽をやるそうよ」といううわさが広がっていたようで、ホールに並べられた100席の椅子はほぼ満席でした。出来具合からするとまだまだ未熟、未完成といってもいい内容でしたが、珍しさも手伝ってかたくさん拍手があり、私たちは、大きな山を越えたという気持ちでした。

その後、鳩ヶ谷氷川神社の例大祭で神楽を奉納し、年金者組合草加支部の誕生会、足立区労働組合総連合新年会、草加ダンス連盟新年会、草加出会の森（介護施設）、氷川神社節分祭、草加金明町さくらまつりと都合8



写真4・新田西文化センターで「赤沢山の悲劇」

回公演しました。

この頃は、「公演することで度胸をつけ、芸を磨く」ということが目標になっていた、様々な団体から声をかけてもらえたことは自信にもなり大変うれしいことでした。

## 二年目（4月～今年3月）

二年目の演目は、「玉織姫、子捨ての場」という平家物語の一節を題材にした劇でした。神楽なのに「法然和尚（坊さん）」が活躍する話で、オヤ？と不思議に思ったこともありですが、この大らかさが南部神楽の親しみやすいところでもあると思います。

上演時間が20分弱と手ごろだったこともあり、舞い手の練習もこれまでよりスムーズになりました。舞にも慣れ、数人で一緒に踊る「神楽の舞」にも挑戦しました。囃子手の太鼓や鉦には余裕が感じられるようになり、笛も吹けるようになって賑やかさが増してきました。草加市長さんが前触れなしに突然やってきて1時間ほど見て帰るといったこともありました。

6月頃だったと思いますが、新田西文化センターの職員さんから「神楽の発表を中心に、伝統芸能発表会を行いたい。」という申し入れがあり、引き受けることにしました。今年の3月に行われましたが、ホールは140人を超すお客さんで一杯になり大成功のうちにと終わることが出来ました。

こうして発足して二年足らずの期間に14回もの公演（発表）をし、鳩ヶ谷氷川神社と新田西文化センターという二つの拠点を得ることになりました。また、市長さんにも興味を持っていただくなど伝統文化の持つ力の大きさと実力以上に地域が受け止めてくれていることを感じています。

## 慣れない芸能の難しさ

子どもの頃、地域に神楽があったという人はいませんが、見たこともないという人もいます。自分でやるのは私を含めて、初めてという人ばかりです。そんな仲間が珍しさや凝った衣装のあでやかさに釣られて神楽をやり始

めた（？）わけですから、なかなか上達しません。

囃子手の太鼓の係は、はじめに口唱和といつて音とリズムを歌のように覚えるたたきやすいといわれました。でも初めてきくリズムで調子が取れない。そこで太鼓のリズムを楽譜に表わすことに挑戦する仲間もいました。

問題は、舞い手の演技です。舞い手のセリフには独特の言い回しがあります。セリフが身につけば動きは付いてくるといわれて頑張るけれども、なかなかうまくいかない。加えて面をつけると視野が狭くなつて周りが見えない。とちつたりよろけたり、退職老人の鈍い動きに笑いの絶えない練習が続くことになりました。

## 指導者の心遣い

神楽会の活動が楽しく続けられるのは、会員一人ひとりの中に「覚えたい。うまくなりたい。」という意欲があるからです。同時にそれを支えて形にしてくれる指導者の存在が欠かせません。

指導してくれる栗駒神楽会からの継続会員の方は、練習日には定刻1時間前には会場に來ています。そして、考え抜いた練習メニューのもとに、東北訛りのある言葉で笑いを誘いながら気持ちを込めて指導してくれます。道具を大事にして持ち物の準備状況もしっかり把握します。幣束（舞い手が持つ道具）は、

すぐにダメになるので替えられるように新しいものを作ってくるし、笛の練習は、釣竿に穴をあけて自分でつくった作った笛（いい音が出ます）を持ってきて行きます……。

こうした姿勢が会員の心をつなぎ、求心力のもとになっています。神楽に対する強い思いと人間的な温かさ、思いやりや情の深さなど魅力をまき散らしながらの指導に、私たちは引き込まれてしまうのです。

## 地域文化に対する思い

「神楽」には、「神が楽しむ」「神を楽しませる」という意味があるそうです。何のために楽しませるのかといえば、願いを聞き入れてもらうためです。平和な暮らしを求める庶民の願いが、里神楽には詰まっています。

私たちの「神楽」は、地元で生まれた芸能ではないので、とりあえず身近な人たちに受け入れられるように地域のお祭りや行事などにもできるだけ参加して、地域の中に溶け込み地域文化の一翼を担えるようになりたいと思います。

そして、「南部神楽」の継承という活動を通して、ますます生きにくくなりそうな社会の中で、人々の心を和ませ、安心の輪を広げる力にもなりたいと思っています。

神楽会の週1回の練習は、和やかで気持ちもまとまっています。まだまだ未熟でこれらの会ですが、みんなで大きく夢を膨らませ、楽しく活動を続けて行きたいと思っています。